

# 柔道指導者の促発身体知に対する意識に関する研究

中川原 知波 東京学芸大学

## 1. 目的

本研究は、柔道指導者の運動指導における促発身体知に対する意識を実証的に明らかにすることを目的とし、柔道をはじめとする運動やスポーツの学習者側の視点に立った促発指導の在り方について検討することを試みた。

## 2. 研究方法

### 1) 対象者及び調査方法

体育授業や柔道教室など様々な指導場面で活躍する柔道指導者94名を対象とし、柔道指導の工夫や学習者への働きかけ、指導に対する意識について、質問紙調査法(Wed 調査・郵便調査法)を実施した。

### 2) 分析方法

柔道指導者の属性等を独立変数として t 検定及び分散分析を行った。運動指導や技術指導で重要だと思うものを選択・並び替える質問項目を作り集計した。データ分析には SPSS25 統計パッケージを使用した。

## 3. 結果と考察

1) 柔道の運動指導で重要だと思うものを選択・並び替える項目において、「学習者の意志や考え」が最も得点が高かった。この結果から、1990年以前の指導者主体の指導から、学習者主体の柔道指導が行われていることが示唆された。その要因としては、「運動学(運動方法学を含む。)」が採用されたことや武道必修化などの影響により、教育的価値や指導の在り方について、これまで以上に盛んに研究が行われてきた背景が影響していると考えられた。

2) 柔道において豊富な運動経験を積んでいる指導者や教育や指導について専門知識を有する指導者は、「観察能力」「処方能力」に対する意識が高いことが示唆された。

3) 競技歴や指導歴が浅い指導者や柔道指導を難しいと感じている指導者は「交信能力」「代行能力」に対する意識が高いことが解釈された。

4) 運動感覚を必要と感じていない指導者は、柔道指導の際、ICTを積極的に取り入れる傾向にあり、運動感覚よりも客観的な指導に対する意識が高かった。主観的な運動感覚よりも、映像等を用いて客観的に観察させる学習の方が望ましいと感じていることが推察された。

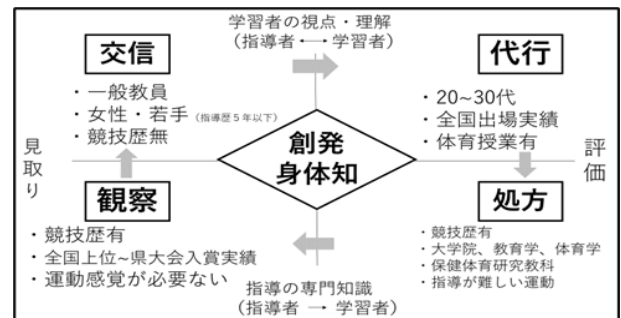


図1 促発身体知と柔道指導者の傾向

## 4. 結論

本研究では、柔道指導者の意識調査を通じて、柔道指導が指導者主体の指導から学習者主体の指導へと変化していることが解釈された。一方で、指導実績間での意識に差がなかったことや主観的な指導よりも客観的な指導を重要視する傾向あり、学習者の視点に立って運動の感覚を重要視する促発身体知に対する意識が高くないことが明らかとなった。また、競技経験の浅い指導者は指導者自身の創発身体知を培い、競技経験の豊富な指導者は学習者の視点から運動課題を捉えることで、学習者側の視点に立ったより良い運動指導につながる可能性があると言える。

## 5. 主な参考文献

- 1) 金子朋友, 身体知の形成(上)(下), 明和出版, (2005a)(2005b)